

日蓮宗寺院の建築観について

一身延山久遠寺 奥之院思親閣領域に着目して一



AK14024 加藤雅之

Keywords

日蓮宗 身延山 久遠寺
思親閣 伽藍 密教本堂

1 研究概要

1.1 研究背景・目的

日蓮宗は身延山久遠寺が総本山であり、日蓮聖人一代の重要な遺跡及び宗門史上顕著な歴史のある寺院を霊跡とし、その伝統により大本山または本山の称号を用いる。日蓮宗の寺院は全国に多々あるが、日蓮が密教思想に影響を受けていることから、日蓮宗建築はその殆どが密教本堂もしくは禅宗小仏堂を用いたとされている。

一方、2013年、2014年度の山梨県近代和風建築調査により、近世以前も含めた久遠寺の諸建築について再評価の動きが広がっている。久遠寺はいくつかの領域に分かれており、その中でも主要な本院境内の伽藍研究は進んでいるが、その他の領域の伽藍研究についてはあまり進められていない。

本研究では、久遠寺の中では狭い領域ながらも、日蓮の像を祀っている思親閣祖師堂等を配する奥之院領域の諸建築を対象に調査を行う。そして、先行研究が行われている久遠寺本院境内や他の日蓮宗寺院との比較を行い、奥之院思親閣の特異性や、そこから分かる日蓮宗寺院の建築観についての考察を行う。

1.2 研究方法

- (1)身延山久遠寺思親閣伽藍諸建築の実測調査を行う。
- (2)身延山史などの文献から思親閣伽藍の変遷をたどる。
- (3)日蓮宗寺院についての先行研究を基に思親閣伽藍についての分析を行い、思親閣伽藍に着目して日蓮宗の建築観についての考察を行う。

1.3 実測調査

調査日：2017/8/4～8/6、10/24

調査地：山梨県南巨摩郡身延町3567

対象：思親閣祖師堂及び拝殿・鐘楼・手水舎・常護堂

2 身延山久遠寺について

2.1 久遠寺概要

身延山久遠寺は山梨県の南西部に位置する山梨県南巨摩郡身延町に現存する日蓮宗の総本山である。総門、三門を通り石段上に本堂、祖師堂、御真骨堂等の主要伽藍、西方を入ると「西谷」と称し御廟所などの諸建築、背後の山上は「奥之院」の諸建築で構成されている。



写真1 身延山航空写真

久遠寺の創建は文永11年(1274)、日蓮聖人が身延山の西谷に三間四面の草庵を結んだのが始まりと伝えられている。日蓮に帰依していた地頭の南部実長の招きで身延山に入山し、数年の間西谷の草庵にて法華經の教を広めた。弘安4年(1281)、改めて寺院として境内を整備、その際南部氏が十間四面の大堂を寄進、日蓮自ら身延山久遠寺と命名したと伝えられている。弘安5年(1282)、日蓮は死去し、遺骨は身延山に運ばれ葬られ、日蓮宗最大の霊地となった。文明7年(1475)、久遠寺が西谷から現在地に移り、境内の整備が随時行われ、身延山久遠寺の基礎が固められた。

久遠寺は度々火災に遭い、その度に再建されてきた。現在残されている久遠寺の堂宇は明治8年(1875)の火災により焼失し、その後再建されたものである。

2.2 奥之院思親閣概要

奥之院思親閣は、思親閣・大孝庵と称せられ、身延山三門から50丁、海拔1148mの、身延の嶺と呼ばれる身延山頂に位置している。思親とは日蓮聖人の親を思う気持ち、大孝とは両親・師への至孝の念を祈念したものである。日蓮聖人は文永11年(1274)から弘安5年(1282)にいたる西谷御草庵での生活で、故郷を思い出すたびに50丁の山坂を登り、山頂のはるか東、故郷安房を望んで父・母・師への報恩を捧げたと伝えたとされている。

3 日蓮宗について

3.1 日蓮概要

鎌倉時代の仏教の僧。貞応元年(1222)、現在の千葉県小湊に生まれ、16歳で出家。延応元年(1239)、比叡山に遊学し、密教を極め、法華経こそが唯一の教えとの信念を唱え、建長5年(1253)、立教開宗の宣言をする。文永11年(1274)、南部実長の招きで身延山に入山し、弘安5年(1282)、池上宗仲の館で入滅した。

3.2 日蓮宗の宗教観

日蓮は仏教の正統は一天台一伝教というように、天台大師を尊敬していたため、日蓮宗は天台宗を教学の大綱としている。しかし、天台宗の宗祖の説いた法華経には衆生を救う力がないとされ、南無妙法蓮華経こそが肝心であるという様に、日蓮宗の独自性も見出している。

3.3 日蓮宗寺院の伽藍形態

日蓮宗は天台宗以外の仏教各宗を否定していたため、建築においても、その殆どは天台宗から来ており、これに禅宗の教義も少し含んだものといわれている。

日蓮宗寺院の基本的な伽藍形態については先行研究があり、石田茂作の『新版仏教考古学講座』、藤島玄治郎の『日蓮宗寺院の建築』等で論じられており、これらの分析を行う。

初期の日蓮宗寺院は、伽藍整備よりも、まず日蓮宗を広めることが重要視された。今回対象としている久遠寺においても、長い間伽藍の計画はなく、僅かに西谷の祖廟を中心として随所に宿坊が散在していたに過ぎず、大規模な伽藍の計画は宗祖開山より200年後の事である。他の寺院においても同様であり、初期は伽藍準備時代ということがいえる。

次第に伽藍が整備されていったのだが、日蓮宗寺院の建築の種類とその配置はその必要に応じて種類も増していったため、初めから不動の原則があったというものではない。しかし通例はあり、日蓮宗寺院の基本的な伽藍配置として図1の様な図が書かれている。正面の門は日蓮宗では仁王門、または二天門と称し、本堂との中心軸上に配されている。そしてその中心軸に沿って鐘楼・鼓楼、塔・三十番神・鬼子母神・祖師堂を対比的に配している。このように配する理由は、日蓮宗が法華経の世界を具現化した、「文字曼荼羅」を伽藍配置構成の拠り所としていたからである。「文字曼荼羅」は、相対している仏・菩薩・仏道修行者・諸天等を対比的に配して書

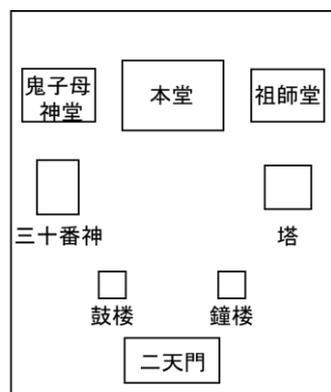


図1 日蓮宗伽藍配置

かれている。

三十番神堂と鬼子母神堂は、日蓮宗では必須となっており、塔は五重塔や多宝塔であることが多く、鎌倉時代の新興仏教で塔の多いのは日蓮宗である。

図1とは異なり、山門からの主軸線が祖師堂を貫く場合もある。また、本堂が祖師堂より大きく書かれているが、祖師堂が本堂より大きいものもある。久遠寺もこの例にあたり、これは日蓮宗の宗祖を重んじる気持ちが建築にも表れたと考えられる。

4 思親閣伽藍について

4.1 思親閣伽藍の変遷

身延山史、続身延山史、身延山史年表、身延山諸堂記、久遠寺古写真等を参考にし、思親閣伽藍を三次元化したものを作成し、変遷をたどっていく。

思親閣の堂宇は日蓮入滅の翌年弘安6年(1283)六老僧の一人である日郎が整備したのがはじめと伝えられている。その後諸堂も増築されたというが、第二十四世日要上人代の元和5年(1619)に加賀藩前田利家の側室である寿福日栄が利家菩提のために祖師堂および拝殿を建立し、寛永元年(1624)に落慶され、これより本格的堂宇の実現を見る。

寛文8年(1669)、第二十九世日蓮上人の代に徳川家綱の御台所によって改めて祖師堂および拝殿が再建された。そしてその後10年の間で思親閣領域の拡張、祖師堂に六老僧像と両親像安置、鐘楼の建立、更には本院境内の本堂前にあった二天門を思親閣祖師堂前に移すなど、この頃から奥之院思親閣領域を重要視していたことがわかる。

思親閣は本院境内の様に頻繁に火災が起こるという事はなかった。また、山頂という事で、資材の運搬の困難や寒冷による施工期間の制約、土地の規模等の面から堂宇の建立や再建はあまりなされなかったため、明治までそれほど伽藍が変わることはなかったと考えられる。

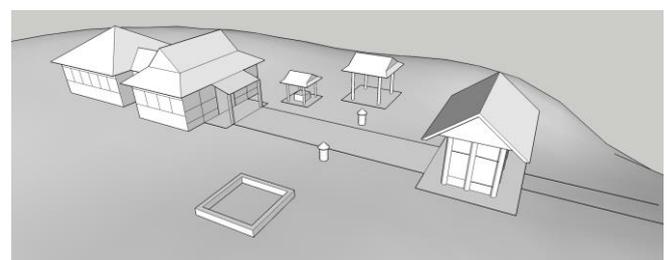


図2 明治初頭の思親閣伽藍

近代において、思親閣の伽藍整備に努めたのは内野日蓮別当であった。日蓮別当は明治40年(1907)から昭和18年(1943)までの三十五年間、思親閣伽藍の整備に力を注いでいる。その結果、祖師堂の改修、祖師堂拝殿・鐘楼・仁王門・手水舎の再建、常護堂の建立等、思親閣伽藍は一新され、特に祖師堂拝殿は平入から妻入になるなど大きく変化した。

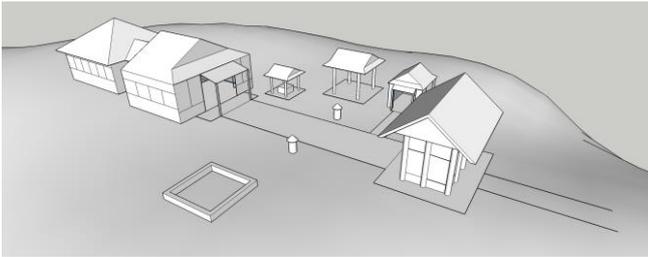


図3 昭和初頭の思親閣伽藍

そしてその後は、拝殿廊下が壊されて拝殿が拡大されたり、祖師堂に事務所が増築されるなど、着々と思親閣領域の整備が行われ、現在では威厳のある伽藍を見ることができる。

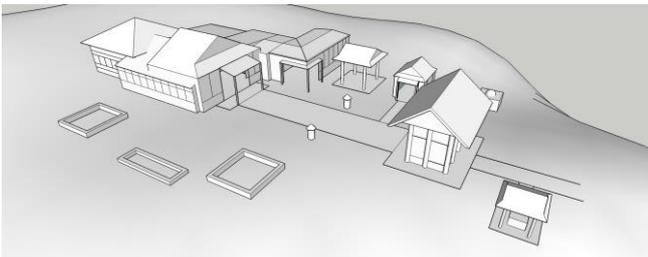


図4 現在の思親閣伽藍

4.2 伽藍配置について

日蓮宗寺院の基本的伽藍配置については先ほど説明したが、それと思親閣伽藍との比較を行う。まず注目すべき点は、思親閣には本堂が存在せず、祖師堂を本堂ともして扱っている事である。他にも五重塔や三十番神堂なども存在しない。これは、思親閣領域は敷地が狭く、それ程多くの堂宇を建てることができなかつたという事もあるが、あくまで他に主要な領域を持つ久遠寺の一領域であり、その中でもより祖師に重点を置いた領域であるという事が理由だと思われる。しかしそれでも仁王門と祖師堂が中心軸上に配され、その軸に沿って堂宇が配されていたり、常護堂には日蓮宗に必須な鬼子母神を祀るなど、日蓮宗寺院の基本的要素を持つともいえるのではないだろうか。

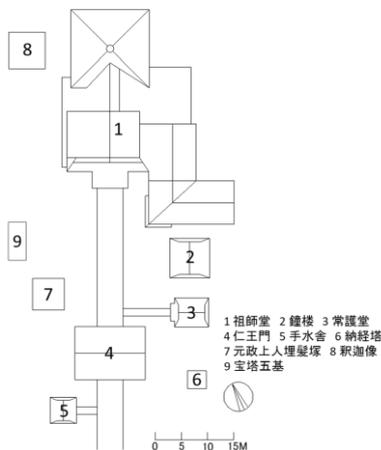


図5 現在の思親閣伽藍配置図

4.3 祖師堂拝殿について

思親閣祖師堂には拝殿が存在し、図6の絵図からもわかるように、元々は拝殿廊下も存在した。

本来拝殿というのは神社建築に用いられるもので、思親閣祖師堂のように仏教本堂に拝殿、拝殿廊下が存在し、権現造りのような形式をとる事は異例である。この理由については特に明記された文献がないが、いくつかの理由が考えられる。

まず一つは、奥之院思親閣という霊場が理由である。ここは日蓮が愛し、生涯の殆どを過ごした身延山の山頂に位置し、ほぼ毎日親に報恩を捧げた日蓮にとって大切な場所なのである。そして、弟子達も日蓮が入滅した翌年から伽藍整備に取り組み、本堂前にあった二天門を移築するなど、思親閣という霊場を大切にしていたことがわかる。そして時代と共に日蓮宗は神格化していき、日蓮は神同様と見なされていった。元々日蓮宗は神仏習合の根本が深いため、神同様と見なされた日蓮が愛した思親閣という霊場ということで、このような神社建築の形式が取られたとも考えられる。日蓮の遺骨を安置している御真骨堂に拝殿が存在するのも同様の理由である。

もう一つは、地形的な問題である。日蓮宗寺院の本堂及び祖師堂は、殆どが正方形平面であった。思親閣境内は徐々に整備されていったため、建立当初は今よりもさらに狭かったと考えられる。そこで大規模な正方形の堂を建てるのが難しく、地形に合わせて縦長にするために拝殿を作るに至った可能性がある。実際、思親閣祖師堂部分は日蓮宗の本堂としては小規模であり、祖師堂単体では寂しかったため、威厳という意味でも拝殿を作ったのではなかろうか。また、思親閣祖師堂は三間仏堂なのだが、縁を壁で囲うという変わった特徴も持っている。これは山頂に位置するため気候がとても寒冷で、冬は積雪も多いという事が理由だと思われる。このように気候や地形に合わせて伽藍を形成していく事は日蓮宗寺院の特徴であるため、思親閣祖師堂及び拝殿も地形や気候に合わせてこのような異例の形をとったという事も十分に考えられる。

4.4 祖師堂について

日蓮宗寺院の本堂については櫻井敏雄の「鎌倉新仏教仏堂平面の成立と系譜に関する研究」で論じられており、そこで「鎌倉新仏教の仏堂平面は二種類に分けることができ、一つは仏堂として体裁を整えている本堂タイプと呼び、もう一つは邸宅風の方丈タイプと呼ぶ。」と述べ



図6 1712年頃の思親閣本堂
(身延山図経より)

ている。思親閣祖師堂は本堂タイプに分類されるため、他の日蓮宗本堂の中でも本堂タイプと比較し、考察する。

日蓮宗寺院の本堂タイプで代表的な例として、本蓮寺本堂を挙げる。本蓮寺は岡山県瀬戸内市牛窓町に位置する日蓮宗の寺院である。本堂は明応元年(1492)建立である。内陣外陣の正面境は揚格子を入れ、内陣脇陣境は中敷居を入れ、格子を嵌殺しに入れる。よって内陣に出入りするには背面の扉か、脇陣の背面側の扉のみである。対して外陣は側面の一部分以外はすべて扉であり、出入りが可能である。この形式は日蓮宗本堂では一般的であり、近世の日蓮宗仏堂にも継承されている。

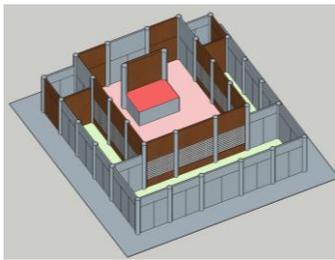


図7 本蓮寺本堂内観

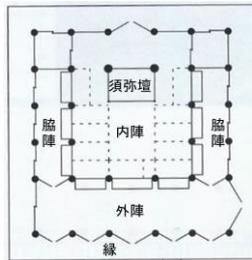


図8 本蓮寺本堂平面図

日蓮宗寺院の本堂はこのように、内陣周囲に嵌殺しの格子や揚格子、取り外し可能な中敷居を多く用い、閉鎖的で強い結界を張っている印象を受ける。それに対し外陣は開放的、扉が用いられているものが多く、開放的な印象を受ける。

この特徴を踏まえ、思親閣祖師堂について考察していく。思親閣祖師堂は先ほども述べたが、三間仏堂で、外縁を壁で囲っている。内陣は外陣より一段高くしているが、その間は建具などで仕切っておらず、一体化している。また外陣と縁の境はすべて扉になっている。これは日蓮宗本堂の特徴とは異なるが、その理由は拝殿にあると考えられる。思親閣祖師堂は小規模で大人数を収容することができない。そこで、拝殿が外陣の役割を果たしているのではないだろうか。それなら内外陣境に仕切りが無くても不思議ではなく、日蓮宗本堂の特徴を満たしているといえる。

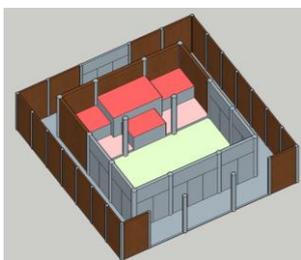


図9 思親閣祖師堂内観

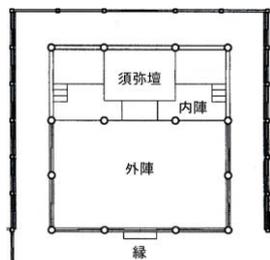


図10 思親閣祖師堂平面図

元々日蓮宗寺院の本堂形式は密教本堂からきており、これとも比較し、考察していく。密教本堂の代表的な例として、長寿寺を挙げる。長寿寺は滋賀県湖南市に位置する天台宗の寺院である。本堂は鎌倉初期の建築で、現存する最も建築年代が古い中世仏堂の一つである。脇陣

はなく、内外陣境は格子戸や欄間で仕切られている。内陣はやや閉鎖的ではあるが、正面からも後ろからも出入りは可能である。外陣は正面部分は出入り可能な部分が多いが、背面部分は不可能な部分が多い。これより正堂（内陣）の前に礼堂（外陣）を付加して密教本堂が成り立つという経過を見ることができる。

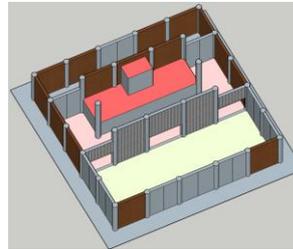


図11 長寿寺本堂内観

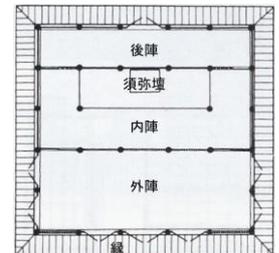


図12 長寿寺本堂平面図

これらを見て分かる事は、日蓮宗本堂は密教本堂より内陣は閉鎖的で、外陣は開放的ということである。これについてはいくつかの理由が考えられる。

一つは、日蓮宗の行事にあると思われる。日蓮宗本堂の内陣周囲に用いられている揚格子は開放し、中敷居は取り外すと内外陣共に開放的な状態となる。これは日蓮宗の行事の一つに題目踊りのようなものがあり、堂宇を広く使うための工夫であったと考えられる。

もう一つは、日蓮宗の教義にあると思われる。外陣が開放的なのは、「誰もが等しく仏と同じ場所・空間まで入ることができる（仏と我々は等しい存在である）」、内陣が閉鎖的なのは、「誰もが等しく仏となれる存在であるが、仏と成る為にはそれに見合うだけの対価を持たなければならない程の信仰である」という日蓮宗の教義観が建築に表れたとも考えられる。

5 総括

本研究では、日蓮宗の総本山である身延山久遠寺の中でも、奥之院思親閣という領域に着目し、思親閣伽藍の特異性を見てきた。そしてそこから分かる日蓮宗の建築観を考察し、日蓮宗の教義観との関連性について考察してきた。思親閣領域は日蓮宗にとって重要な場所であるため、今後その価値が再認識され、更に研究が進むことを期待したい。

参考文献

- 1) 『身延山久遠寺研究—伽藍の変容について—』 荘司 柚太
2014年度 芝浦工業大学 卒業論文
- 2) 『日蓮宗寺院の建築』 藤島亥治郎 雄山閣 1936
- 3) 『鎌倉新仏教堂平面の成立と系譜に関する研究』 櫻井敏雄
1978年度 東京大学 博士論文
- 4) 『新版仏教考古学講座』 石田茂作 雄山閣 1984
- 5) 『身延山史』『続身延山史』『身延山諸堂記』
- 6) 『身延山史年表』 望月一靖 1985
- 7) 『日本建築史図集』 日本建築学会 2010